

一昨日は、4月7日金曜日でした。イエス様が十字架に架かったことを記念して、受苦日の黙想礼拝をしました。先週の日曜日が、復活前主日で、イエス様がロバに乗ってエルサレムの都に入られたことが記念され、その後、1週間の間に、イエス様をめぐって、目まぐるしい出来事の展開があったことを、毎日の出来事を追いながら考えてゆきましょう。

イエス様が十字架に架かれた週のことを受難週とか聖週とか呼んでいますが、この1週間の曜日には、それぞれ形容する言葉があって、イエス様を囲んだ人々にどんなことが起こったのか、教会は伝統的に説明してきました。

日曜日は、棕櫚の日曜日。この日、エルサレムの住民は、手に棕櫚の葉を持って、イエス様を歓迎したのです。本当は、ナツメヤシの枝ですが、英語ではどちらも **Palm** と呼ぶのでこの名がつきました。月曜日は、不安の月曜日。イエス様が、エルサレムの神殿で、両替人や商人が商売しているのを追い出して、大暴れして、人々を不安がらせた日でした。

火曜日は、議論の火曜日。イエス様をやっつけようと、ファリサイ派や律法学者たちが、権威についてや、皇帝に税金を納めるのが正しいかどうか、など、多くの議論を巻き起こしたのですが、イエス様をとっちめることができず、イエス様を殺そうという気持ちが高まってくるのです。

このような目だった活動を月曜日と火曜日行ったために、水曜日は、イエス様一行は、エルサレムへゆくことをやめて、ベタニアという、都から3キロほど離れたところで黙想をしました。黙想の水曜日、と言われていています。その時、高価なナルドの香油を、女の人がイエス様の体にかけたものですから、そんな贅沢なことをしないで、その油を売って、貧しい人に与えたらいいのに、というイスカリオテのユダの発言などが飛び出して、イエス様が裏切られてゆく話に続くのです。

そして、聖餐制定の木曜日。最後の晩餐をして、その後ゲッセマネの園で逮捕されるわけです。

この後、金曜日は「御苦しみの金曜日」。十字架にかけられ、土曜日は「安息の土曜日」ということで、おそらく、イエス様は、墓の中に安置されていましたし、弟子たちは、最後の晩餐の部屋にいて、じつと息をひそめて、イエス様の敵であるファリサイ派や律法学者に見つからないように隠れていたと思います。福音書には、安息日である土曜日に、弟子たちが行ったことは何も書かれていません。

ところが、唯一、マタイによる福音書には、土曜日の出来事が書かれている箇所があります。ユダヤ教の指導者たちは、イエス様が復活することを予告されたので、遺体が弟子たちに運び出されないように見張りをした、という記事です。

(新共同訳聖書 新約59ページマタイ27:62～)

#### ◆番兵、墓を見張る

62:明るく日、すなわち、準備の日の翌日、祭司長たちとファリサイ派の人々は、ピラトのところに集まって、こう言った。「閣下、人を惑わすあの者がまだ生きていたとき、『自分は三日後に復活する』とっていたのを、わたしたちは思い出しました。ですから、三日目まで墓を見張るように命令してください。そうでないと、弟子たちが来て死体を盗み出し、『イエスは死者の中から復活した』などと民衆

に言いふらすかもしれません。そうすると、人々は前よりもひどく惑わされることになります。」ピラトは言った。「あなたたちには、番兵がいるはずだ。行って、しっかりと見張らせるがよい。」そこで、彼らは行って墓の石に封印をし、番兵をおいた。

ところが、翌日、日曜日の朝、天使が降って来て、イエス様の墓に置かれた石をわきへ転がしたので、「番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。」と今日の福音書では書かれています。

そして、今日の福音書に続く、28章11節からですが、イエス様の墓が空っぽであったことは、実際に当時のユダヤ人たちを戸惑わせた事件だったようです。

#### ◆番兵、報告する

11:婦人たちが行き着かないうちに、数人の番兵は都に帰り、この出来事をすべて祭司長たちに報告した。そこで、祭司長たちは長老たちと集まって相談し、兵士たちに多額の金を与えて、言った。「『弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んで行った』と言いなさい。もしこのことが総督の耳に入っても、うまく総督を説得して、あなたがたには心配をかけないようにしよう。」兵士たちは金を受け取って、教えられたとおりにした。この話は、今日に至るまでユダヤ人の間に広まっている。

イエス様の敵であるユダヤ人指導者たちでさえ、「弟子たちが死体を盗んでいった」とまで言わなければならないほど、この墓が空っぽであったことは、隠せない事実であったのです。そして、このことを最初に目撃したのが、女性たちだったことも、それを裏付けることでした。もし、これが作り話であるなら、その話の目撃者は、男性にならなければならなかったはずですが。というのは、当時のユダヤ人社会では、女性の証言は認められず、裁判で証言できるのは、大人の男性だけだったからです。

イエス様の墓が空っぽで、復活された、ということが、私たち、限りある命を持って生きている者たちにとっての、希望だということを、改めて私たちは確信したいと思うのです。

パウロは、コリントの信徒への手紙一の15章で、

「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです。この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です。しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。」このように言っています。

もう10年以上前ですが、「千の風になって」という歌が話題になったことがあります。ここに出てくる歌詞は、死というものが、人間のみじめな最後ではないことを教え、希望を与えています。あの歌では「私のお墓の前で、泣かないでください。そこに私はいません。」と歌います。しかし、ちょっと飛躍があるのではないかと、思います。キリストの復活を信じている私たちは、「イエス様は墓の中にはおられない。復活して、神様の所に昇られた。だから、やがて私たち墓の中に入る者も、やがて、眠りから覚めて、キリストのように復活する望みをいだいて墓にいる。」ということではないでしょうか。

この希望がある限り、私たちは、どんなつらい生涯を歩んで、苦しんで死ぬことになっても、絶望で終ることはない。今日の特赦にあるように、あの、一番みじめな十字架の死を遂げたイエス様が、復活して、私たちにも永遠の命の門を開いてくださった。それを感謝して、イエス様の復活を自分のことのように祝いたいと思うのです。